

* 登録有形文化財の太陽塔望遠鏡のドーム修理始まる

太陽塔望遠鏡（塔望遠鏡室）は大正15年3月20日竣工、面積は331平米である。この建物は、東京天文台75周年誌、90周年誌、東京天文台の百年にも「塔望遠鏡」とある。よく使われる太陽分光写真儀室は通称「オバケ」といわれたサイデロスタットを使い、太陽光のカルシウムのKライン分光器を使った観測をしていた建物のことである。塔望遠鏡を通称アインシュタイン塔というが、ドイツのボンにある本物の「アインシュタイン塔」に形も目的も少しは似ていて、書かれたものには通称アインシュタイン塔と呼ばれるともあるが、東京天文台で実際に塔望遠鏡を使って働いていたものがこの建物をアインシュタイン塔と呼んでいるのを聞いたことがない。筆者は昭和41年、岡山から三鷹に転勤し、牧田さんの指示で、ツアイス製の配電盤の切れたヒューズの交換ができなくて死んでいた塔望遠鏡の配電盤を作り替えて生き返らせた。そして、しばらくは守山、日江井、平山などの先生方が観測したが誰もアインシュタイン塔などとは呼ばなかった。見学者にはアインシュタイン塔の名前はかっこいいかもしれないが、ドイツに本物があり、その名前をかたるのは筆者には耳障りなのである。



写真1 工事用足場の組まれた塔望遠鏡

この望遠鏡は研究室から離れた崖に近い所にあり、人目が行き届かないので観測に使われていた頃から、ドームの屋根板の銅板が盗まれたり、府中の関東村の進駐軍の悪ガキどもにガラス窓が割られて機械類を盗まれるという被害が続き、時の萩原台長が進駐軍の司令部に抗議に行ったと聞かされている。筆者が塔望遠鏡で働いている頃にもドームの銅板が盗まれたり、窓が割られたりすることがあり、建物の外部のはしごの下部を切ったり、窓を塞いだり、ついには玄関の扉の窓ガラスを鉄板に替えたりした。

塔望遠鏡の更新されたものが、岡山の65cm太陽クーデ望遠鏡であり、この望遠鏡が本格的に運用され始めて塔望遠鏡の使命は終わり、長い休眠に入っていたのである。2000年から国立天文台の一般公開が始まり、塔望遠鏡は外観のみの公開が続いているが、外壁のタイルの美しさとは裏腹にドームの痛みがひどく、シーロスタットにはシートが掛けられ雨水を防いでいるが、雨漏りの水はドームのシーロスタットの置かれた床に溜まり、その水が地階の床まで濡らすようになり、ただでさえ半地下の観測室はジメジメとし、今はたぬきか、ハクビシンの生活の場となりひどいにおいさえ放っている。

そこで、キャンパス委員会にドームの雨漏り修理を訴え、やっと雨漏り修理の工事が12月16日から始まった。登録文化財になっていることが修理してもらえる後押しになったことも事実であろう。まずは、雨漏りを止め、これ以上の荒廃を止め、次には止められている電力を回復し、先ずは掃除をしたい。たぬきかハクビシンの住まいは森にお帰りいただいて、塔望遠鏡の331平米に及ぶ空間を有効利用したいと考え、今年度中に何とか電力を回復する目処が立ちほっとしている。写真1、2は工事の始まった塔望遠鏡である。



写真2 ドームの周りにも足場が組まれた